

A651
117

軍縮会議に対する我主張の根拠

国立国会図書館



0056186-000

A651-117

軍縮会議に対する我主張の根拠

海軍有終会

1934

AJB

A651

117

昭和九年十月

軍縮會議に對する我主張の根據

(以印刷代原寫)

財團法人
海軍有終會

A651
117

391.1



1028449

軍縮會議に對する我主張の根據

一、緒言

來るべき軍縮會議に對し、帝國が既存條約の不利なる拘束より脱却し、現行比率を打破し軍備平等權の確立を期すと云ふ強硬なる主張を有して居る事は既に度々新聞紙上にも發表されたが、何故に帝國が如此主張をせねばならぬかと言ふことは未だ充分に説明されて居らぬ。之は此の非常時局に際し國民全部が良く諒解して居らねばならぬ事であつて、軍縮會議がどう進行しようとするに國民が一致して我當初の主張を支持し、又其の局に當る者も始終其の公明なる主張を貫徹するに是れ努め、彼の倫敦會議の如き醜態を演ぜざる様にせねばならぬ。

二、列國の對日態度

最近軍縮會議を前にして列國の對日態度は一言にして云へば平和の假面を被れる囑喝態度であつて、所謂不戰之を屈せんとする態度に出で、居る。華府會議及倫敦會議の當時帝國は、世界平和と國民負擔の輕減とを欲するの餘り、當時の國際狀況に鑑み忍ぶ可らざるを忍び特にロンドン會議にあつては其の短期的なりしが爲めに不利を忍んで賛成し、一面英、米は其の外交手段に依つて自ら欲する通りの有利な條約を締結して完全に帝國を抑へ得たのである。處が今日に於ては昔とは形勢一變し、滿洲事件、上海事件となるに及んで其の現實の問題に就ては何一つ帝國を抑へつける事が出来なかつた。國際聯盟を極度に活動させ、現地に大が、りな調査團を派遣し、對日開戰の宣傳さへやつて見たが、帝國は其の主張を一步も退けずに遂に脱退迄敢行して押し切つて仕舞つた。此處ま

て來ると列國も全く策の施し様がない。一方帝國の産業は長い間苦汁を吸つた效があつて、現在ではどん／＼列國の産業を壓迫して、經濟的に伸長し始めた。之に對しても百方手を盡して見るが防止することが出来ぬ。何れの方面より見るも従來の様に或種の壓力を加へて、自己の權益を保護する事は出来なくなつた。若し來年の軍縮會議で日本の主張を通したなれば最早どうする事も出来なくなる。東洋に於ける事柄は何でもかでも日本の爲す儘に任せねばならぬ事になる。彼等の唯一の望は軍縮會議で日本を抑へ、辛うじて従來の權益を保持して行かうと云ふ事になつた。

そこで軍縮會議を彼等に有利に導く爲には、帝國を囑喝するより他に策がない。最近軍縮豫備交渉に於て示された彼等の態度竝に其の建艦計畫の發表等は明かに此の「平和の假面を被れる囑喝」である。

去る五月廿三日米國海軍長官は若し日本が比率の變更を要求せば米國は太平

洋根據地を更に強化すべしと聲明し、同廿五日前下院海軍委員長「ブリテン」氏は日本の比率變更は太平洋制覇の下準備なりと語り、六月五日、大統領邸に於ける海軍首脳部の豫備交渉に對する最終會議にては出來得る限り現状維持、縮少の場合は現在比率維持、戦艦廢止反對、一萬噸型維持に決定し其の態度強硬なりと傳へ、「ブラット」提督は日本の比率更改要求は論理的根據なしとの論文を發表し、六月廿一日には海軍本會議延期説を發表す。更に五月二十二日には英、米、共同戦線を以て日本の主張を抑壓すべしと傳へ、六月廿一日の英、米豫備交渉にて英國は大軍擴案を提議し我國を暗に牽制せんとし、同月二十三日には同國海相「エアモンセル」氏は軍縮の迷夢を棄て、起つべしと演説し、樞相「ポールドウイン」氏は之に賛意を表し、更に六月廿九日、英、米、日の五・四・四を提案すべしと云ひ、更に七月一日には米國は最後の切札として戦債を利用し英國を抱込み、比率の現状維持を圖りつゝありと傳へらる。

建艦計畫に就ては軍縮本會議切迫せる現在、英、米、佛、伊等いづれも條約量迄の計畫を發表し、各々其の建艦能力ある事を誇示して居る。然し帝國の様に既に殆んど條約量迄建造し、猶不安ある爲め第一次、第二次の補充計畫を實行して居ると云ふ様な熱心さは認められぬ。即ち彼等の建艦計畫は會議の爲の建艦計畫と云はねばならぬ。彼等の云ふ處は世界平和の爲めと稱し、帝國に現比率を押し付け様とするのであるが、其の眞意は何とかして此處で今迄に贏ち得たる有利の状態を持続せんが爲め最後の防禦線を守らうとして帝國を囑喝して居る譯である。

三、國防の本義

そこで軍縮會議に對する帝國の主張の根據を説明する前に、先づ國防の本義と云ふ事に就て述べて見やう。

抑も人は皆理想があつて自分の一生を其の理想に向つて捧げて居ると同様に國家にも必ず理想があつて常に達成に努力をして居るものである。此の努力が人類文化發展の原動力であるが、此等の國家の理想は必ずしも調和融合し得るものでなく、時には排他的となり相反噬する事の少くないのは、個人の場合と全く同様である。

勿論個人が寄り集つて社會を作つて居る際、何時も喧嘩ばかりして居るのでなく、よく協調し相互に相扶けて居り、表面如何にも圓滿に見える様に、何れの國家も自分から進んでどん／＼他を排して、わざ／＼事を構へる様な事はしない。即ち國際協調と云ひ世界の平和と云ひ、表面的には如何にも立派な事を唱へて居るが、決して國家の存立をも危くし其の有する理想迄犠牲にしようなどと云ふ殊勝な心掛けは持つて居ないのである。

此の國家の理想を指して國是と謂ひ、國是を實現する爲に其の時の情勢に應じて定められた方策を國策と謂ふのである。言ひ換へれば國是は遠い理想であつて國策は現實に即した實行上の一般方針である。然るに各國の國是は必ずしも一致し難いものである事は上に述べた通りであるから、其の國策が時に或は排他的となる事は已むを得ない事である。何となれば國策としては常に先づ自らを強化し國是實現の實力涵養を第一義とするからである。それであるから、如何に世界平和、國際協調と云つた處で、それは表面上の事であつて、國際關係は平時であらうが、戦時であらうが一つの連続した闘争の歴史である事は明かである。それ故に退いて其存立を擁護すると進んで積極的に其の達成を圖らんとするとに論なく、常に國家實力の満を持して外力の壓迫に備へなければ國家は遂に衰退するに到る事は當り前である。

是が即ち現代國家が常に其の實力を充實して以て有事の際に備ふるは勿論、平素より相手國をして乗ずる事が出来ぬ様にしなければならぬ理由であつて

國防の本義と云ふのも此處にあるのである。そこで帝國の國是は世界に皇道を敷き平和を招徠して人類の福祉を増進せしめんとする我建國以來の精神であつて、其の實現の手近き一端として常に先づ東洋の平和を保持し、東亞諸國民の爲め其の發展を助けるにある。而して之が實行の爲、明治維新以來遠くは日清、日露の二戰役に國運を賭し、近くは滿洲事變を契機として、聯盟脫退をすら敢行して、我滿蒙の經綸の實現に努力して居るのである。滿蒙經綸の目的は先づ此地で以上の帝國國是を實現し、以て其の慶福を東亞の諸國民に頒つと共に、依つて以て我國力を充實して天下に正義を弘むる實力を涵養しようとするにある。夫れ故我國防の要諦は我國の存立を脅かし、以上の我國策遂行に對して妨害を加へんとするものを排除しようとするのであつて、國家の存立が絶対なるが如く國防亦絶対である。現在我國策に對して一番妨害を加ふる可能性のある國家は何と云つても米、露である。露國の事は其の大部は陸軍を以て備ふるが、

米國に對しては海軍々備を以てせねばならぬ事は當然である。軍備平等權を確立して國防の安全感を充たすと主張する根據は此處にあるのである。

四、軍縮の眞意義

前節に説明した様に各國家が其の國策を遂行せんとする場合には互に利害の衝突を來たすを免れず、必ずや排他的になるのであるが、從て其の結果、實力を以て之を貫徹せねばならず、而して其の最も重要な要素は其の軍備である。處が何時の時代でも或國が充分其の國策を實行しようとするれば、益々大きな軍備を持たねばならぬ、而して其の大きな軍備は必ず隣國を脅威して其の國に之に對抗する丈の軍備を作らせる。斯様にして進んだならば軍備と云ふものは際限なく膨脹して行つて停止する處を知らぬ。之では困る、お互に何とか出來ぬものだらうかと云ふのが軍備縮少會議の起りである。華府會議は英、米、日

どん／＼海軍を擴張して行つて、放つて置いたらどんな事になるか判らぬと云ふので米國が云ひ出した會議であつて、すつたもんだの結果、主力艦、航空母艦に對し五・五・三の比率を決めて一先づ落着いた譯だ。

そこで軍縮の眞意義であるが之は、次の如きものでなければならぬ。

一、世界平和を確立するものである事

即ち一國の軍備が他國の安全感を害さぬものである事。云ひ換ふれば互に自ら守るに充分にして他を攻むるには不充分なるものでなければならぬ。

二、軍縮に依つて各國の經濟負擔を軽減せねばならぬ

軍備は見方によつては、固より不生産的なものである。故に各國が皆軍備を撤廢してそれでよいならば、之れほど國の經濟負擔を減ずる事はない。然し前にも述べた通り國策遂行上どうしても軍備が必要であると云ふ事になれば充分な軍備があつて始めて國家が成り立つのであるから、大きく見れば軍備

あつての生産、即ち軍備も間接には生産的であると云ふ事が出来る。唯難しい點はどれ丈が必要かと云ふ點である。

總ての企業は最小限度の資本を以て最大の効果を擧げるが理想とする處である。之と同様軍備も最小限度の入費で最大の効果を擧げねばならぬ。そこで苟しくも軍縮と云ふ以上、入費を今迄より減じ、或は今迄要ると考へられて居た程度より少なくするものでなければならぬ。

五、華府、倫敦兩條約は軍縮の目的を達せず

そこで華府、倫敦兩條約が軍縮の目的を達して居るかどうかと云ふのに、之は決して達して居らぬ。否な寧ろ此の兩條約の爲に軍備競争が起つて、反つて各國に非常に悪い結果を残したのである。次に其の理由を説明して見よう。

一、艦種別制限比率は劣勢海軍國の安全感を害す

現在の軍備制限が艦種別に比率を定めて居る事は周知の事實であるが、之が何故悪いかと云ふ事が判つて居る人が少い。之は角力に就て例を取れば良く判る。太刀山、鳳と云ふ兩關が盛んな時代に、世間では鳳が太刀山を破る事に非常に興味を持つて居た。此の兩關を比較するに身長、體重、臂力等、總て太刀山の方が優れて居たが、術力に於ては鳳必ずしも太刀山に劣つて居らぬと云ふ事から、世間の人が鳳に望をかけたのである。此の場合、鳳が術力に於ても太刀山に敵し得ないと云ふ事が明かだつたらどうであらう。何人も鳳が勝つたらうなど考へる人はあるまい。主力艦も航空母艦も補助艦も皆劣勢で、潜水艦だけ同じだとして、日本が米國に勝ち得ると考へられるであらうか、然かも各艦種の噸數迄制限されて仕舞つては、其の間に奇想天外的の術力を現はす餘地が全くない。殷鑑遠からず、我海軍に於て友鶴事件等の生じたのは何故であらうか、限られた噸數にて同艦種の劣勢を補はんが爲、計畫に無理に無理を重ねた

結果である。

一體、艦と云ふものは大體其の大きさ即ち噸數によつて載せる物に限度があるのである。だから出来るだけ無駄の重量を省いて、艦を軽く作つて澤山の兵器を載せ様とするのは各國の造船家が苦心して居る處である。一萬噸巡洋艦の那智、妙高が出来上つた時は、八吋の大砲を外國の一萬噸型より二門も多く積んで居たので、列國とも皆驚異の眼を見張つたのであつた。即ち日本の造船家は非常に優れた計畫上の技術を有して居たのであつた。處が其後段々研究して見ると、一萬噸型に大砲を二門位餘計に積んだのでは、到底劣勢の比率を補ふ事が出来ない事が判つて來て、無理な計畫だと云ふ事は判つて居ながら武裝がまだ足らぬ、まだ足らぬとやつて居る内に遂に限度を越して轉覆する様な艦になつたのだ。そこで之ではならぬと云ふ事になつて、加藤大將を委員長とする調査會が組織されて、全艦艇の性能が調べられた。其の結果、無理をしてゐる事が判

り友鶴が貴き犠牲になつて、無軌道にならうとして居た計畫を軌道の上に引戻した事は非常に結構な事であつた、そして今更の如く比率主義が甚だ悪かつたと云ふ事がよく判つた。又最近軍艦の衝突事故が多い事は新聞紙上でも判る通りで、大きなものは驅逐艦深雪、電の衝突等と云ふ事件がある。之も制限の爲てあると云ふ事が出来るのである。何故なれば少ない隻數の艦で、敵の大艦隊をやつゝけるには、どうしても尋常一樣の方法では行かない。猛訓練に猛訓練を重ね、術力を向上せしめて由つて以て比率による不足を補ふと同時に、何か敵に對し意想外の手を用ひなければならぬ。即ち奇襲或は強襲をしなければならぬ。そして敵と正面より對等にぶつつからないで一部分を撃破し、次に他の部分を撃破しようとする所謂分撃の方法に出なければならぬ。之をやるには特に高速の運動をやらねばならない事になる。之が非常に冒險的の行動になる事は想像するに難くないだらう。其の爲に演習に於ても、何時も此の高速の接近運動

の練習をして居る譯である。然かも眞劍にやらねばならぬ。此の結果衝突とか沈没とか云ふ不祥事件が續發するのである。

此の二、三の實例で華府、倫敦の兩條約が如何に帝國の海軍々備に禍をなしたかと云ふ事が良く判るだらう。即ち建艦計畫の上にも作戰計畫の上にも、斯様な制限があつたのでは帝國の國防の安固は期し得られないのである。

二、軍縮の結果反つて失費多し

更に軍縮の大なる目的の一つである處の經濟的には、果して得た處があつたかどうかと考へて見るのに、之も反つて多大の損失があつたと云ふ事になる。

第一は主力艦の改装工事である。一番新しい陸奥でも進水後十五年になる。其の他の主力艦は皆之より艦齡が大きいのであるが、此の長い年月中に種々の物が進歩した事は素晴らしいものである。華府會議の結果は是等の主力艦に三〇〇〇噸の水中防禦を附し、之に相當するだけ馬力を増してもよいと云ふ事に

なつたので、各國とも競うて改装工事を始めた。處が種々戦術や兵器が進歩して來るとそんな簡単な改装をやつて居る丈では満足出來なくなつて來て、各國とも所謂主力艦の近代化と云ふ事をやり出した。日本の主力艦の前檣が、あの「グロテスク」な怪物の様な形となつたのも、此の近代化の結果である。之を卑近な例を取つて説明して見よう。

田舎の舊家が三百年來先祖傳來の住宅に住んで居たが、其の息子が洋行して歸つて來て、舊式の住宅には住み難いと云つて之を改造し始めたとする。椅子や「テーブル」を持ち込んで居る内は先づ無難であるが、「ベッド」を持ち込み、疊をはがし、蒸氣暖房を設ける様になると段々釣合が取れなくなつて、之を西洋館の様に效力あらしめる爲には、戸、障子を直し、通風採光迄考へなくてはならず、遂には家屋の構造迄直さねばならなくなつて、反つて初めから新築した方が安いと云ふ事になる。

今の主力艦改装はどうであるかと云ふに、未だ新しく造つた方が安いと云ふ處迄は金を費つて居ないだらうが、日本家屋に蒸氣暖房を附した位の改造は行つて居る。さうだとすると、改装の爲め本當の近代化されたかどうか頗る疑問である。火鉢を使はずに蒸氣暖房を使った位の利益はあつても、冬中西洋館の中で薄着で済ませる様にはならない。矢張綿入れを着なければならぬと云ふ程度である。

華府會議後から艦船整備費として艦船改装費に使用した金額は、約壹億貳千五百八拾萬圓であるが、之が果して有効に使用されたかどうかは甚だ疑問である。少くとも之だけの金を費つて自由に新しい艦を作つた方が良いものが出來たであらうと云ふ事は想像出來る。

次に一萬噸以下の補助艦に就ては艦種別の制限があつた爲、随分無理な計畫をした事は前にも述べた通りだが、華府會議以後使つた建造費は

軍艦製造費

約七千百貳拾參萬圓

補助艦艇製造費

約七億七千八百貳拾六萬圓

計

約八億四千九百四拾九萬圓

の多額に上り、猶ほ一九三五、六年頃の危機突破の爲には、更に莫大な豫算を要求して居る事はよく知られて居る通りである。

軍縮會議がなかつたら、どれだけ入用であつたかと云ふ事は、當時の國際狀況等に依つて異なるから推測する事は困難であるが、振り返つて考へて見るに世界經濟恐慌時代で不景氣が續き、英、米すら經濟的にまいつて來たのだからたとへ會議が無くても、そんな筥棒な建艦競争が起つたとは考へられない。つまり日本は制限がある爲に、反つて窮屈な計畫で無駄な金を費つたと云ふ事になる。

之は日本ばかりではない、亞米利加でも「チャールズ、コーナルド」海軍大

佐が海軍々備制限論と云ふ論文中で、數字を擧げて米國政府は「ワシントン」條約の結果、一文も節約を行ひ得なかつたと論じて居る。

つまり亞米利加の様に條約文の紙の上で、日本をやり込めて非常な有利な地位を獲た國でも、軍縮は得ぢやなかつたと云つて居る事から考へれば、軍縮で經濟的に利を見たと言ふ國は一つも無い事になる。

要するに軍縮の結果は少しも目的を達して居ない。少くとも日本に取つては迷惑千萬な結果になつたと云ふ事がよく判つたのである。

六、來るべき軍縮會議の對策

以上で何故帝國海軍が強硬の主張をなすかと云ふ事が判つた事と思ふが、それには海軍ばかりでなく國民の強い決心がなければならぬ。

外務省では華府會議の廢棄の通告等はさうあせつて、出さなくてもよいでは

ないかと云つて居るさうだが、之は前から述べた通り、帝國の決心を示し會議を有利に導く爲に是非必要な事である。世間には華府、倫敦會議の結果、帝國海軍がどれ程不利な境遇に追ひ込まれたかと云ふ事を知らないで、所謂倫敦條約反對派の海軍の強硬分子が、國際協調の精神も考へずに無茶をやると考へて居る人が尠くない様だ。之は思はざるも甚しきものであつて、所謂強硬派と云はれる人々でも、大きな軍艦を作つて戦争を仕掛け様なんて考へて居る人は一人もない。

戦争せずに済めばこんな良い事はない。然し國防の重責が全う出来ない。金は要るばかりだ、艦は悪くなるばかりだ、演習は難むづかしくなるばかりだと云ふ事を現實に認めて居るからこそ、身命を賭してすら主張して居るのだ。

そこで次の會議で帝國の主張が通るか、又は決裂して自由建艦競争になつたら又澤山のお金が要るだらうと考へるかも知れないが、そんな事は決してない。

今日迄の列國造船の有様を見ると、決して日本は列國に負けては居らぬ、競争が起つた場合困る國は寧ろ英、米である。如何に軍備金をかけたからと言つて之に依つて戦争せずにすめば、戦争するよりも非常に安値である、況んや負けた時のことを思へば更に一層安價である、所謂古語の「忘戦是危ふし」の譬への通りである。而かも帝國海軍は我國防に適した最もよい能率的な建艦計畫を持つて居るに於てをやである。然し之は軍機の祕密だから茲に説明は出来ない、卑近の例を以て説明して置く事にしたい。

先日「キングコング」と云ふ馬鹿々々しい活動寫眞があつたが、軍縮後日本で現在の亞米利加の艦隊に對しては、「キングコング」の様な軍艦を一隻作つたらどうだらう。亞米利加がいくら強いと云つても、「キングコング」一匹に對しては手も足も出まい。又俠客の喧嘩で

甲組 日本刀十本、ナギナタ十本、短刀十本、槍十本、短銃十挺

乙組 日本刀六本、ナギナタ六本、短刀六本、槍六本、短銃六挺

て相對せしめたとすれば、乙組が勝つ事は第一に武器が優れて居て、之を使ふ人間の腕も餘程優れて居なければ話にならない。處が正宗の銘刀を六本揃へたり、最新式の「ブローニング」短銃を六挺揃へる爲には金がかゝるし、技倆の優れた人間を集めるにも金がかゝる。此れが制限があつても武器甲組五十個乙組三十個と總數丈定められたなら乙組は組の人間に一番適した武器、例へば短銃を二十五挺として残り五挺の日本刀を用ひるかも知れない。かうすれば短銃は南部式でもよく日本刀も正宗の必要はあるまい。人間を集めるにも苦心して集めないでもよい。つまり武器に個別の制限があるよりもずっとやりよくなり、勝ち得る見込も多くなる。

然し實際俠客の喧嘩にそんな制限がある筈が無い。人數が少ければ少いで、金が無ければ無いで一番有效な方法を撰んで果たし合をする事は明かである。

帝國の海軍々備も其の通りである。帝國の國策を遂行するに一番能率のよい費用の要らない軍備は既存條約を破棄して始めて出来るものである。之を國民全體が明確に吞込んで、來るべき軍縮會議には舉國一致我主張を貫徹せねばならぬ。

「終」



